

日本における台湾文学の研究について

松 永 正 義

本稿の目的は、日本における台湾文学研究の歴史と現状を概観することにあるが、このテーマについてはすでに下村作次郎「日本における台湾文学研究」(1992. 3. 以下参照文献のデータは、文末に付す「日本における台湾文学研究文献目録」参照)に、簡にして要を得た記述があり、また同稿に付せられた「戦後日本における台湾文学研究関連文献目録稿」は、戦後日本における関連文献のほとんどを網羅した労作である。実のところ私はいまこれに付け加えるべきものをさほど持っているわけではないが、今の時期、いろいろな角度から研究史を振り返ってみることも、意味の無いことでもあるまいと思うので、とりあえず戦前以来の研究史を、戦前、1960年代まで、1970年代以後、の三つの時期に分け、それぞれの時代について簡単な総括を加えてみることにする。文末に戦後日本で翻訳、出版された台湾文学の単行書と、主要な研究論文のリストを掲げておくが、これはそのほとんどを下村氏の労作に負うもので、同氏の目録の抜き書きといった程度のものにすぎないが、全体の体裁上あえてここに別に掲げておくこととする。詳細はぜひ下村論文を参照してほしい。なお、戦前の台湾における研究や、台湾人が日本で発表した論文などにも触れるつもりなので、「日本における」という意味は、「日本島内における」あるいは「日本人による」という意味ではなく、「日本語で書かれた」、つまり日本人を重要な対象の一部として書かれたもの、というほどの意味でうけとってほしい。

1. 戦前の研究

戦前日本国内には、台湾文学の研究はない。そもそも台湾文学の紹介そのものがごく少なく、楊逵ら数人の作家の数編の作品が紹介されたにとどまる。日本の文壇で活躍した台湾人作家もほとんどなく、朝鮮に比して、台湾の文学状況は、日本国内で知られることが少なかった。ただプロレタリア文学を通じてのつながりはいくらか有り、たとえば窪川鶴次郎のように台湾文学についてもを言っている例もないではないが(『台湾文学半ヶ年(1)——昭和十八年下半年小説総評』、『台湾公論』1942年2月号)、これも全体の状況をどれほどに理解していたのかはわからない。

台湾島内でも研究はごく少ない。台湾人によるものについていえば、台湾に近代文学の形成されるのは1920年代のことであり、それも37年には壊滅の状態に追い込まれてしまうの

で、近代文学については研究の対象となるだけのいとまがなく、また研究できるような条件もなかったものと考えられる。したがって残されているのは、旧文学（詩文など）についての旧来の方法（詩話など）によるものや、雑誌の月評、年度評に類するものがほとんどである。ただ中で黄得時の「台湾文学史」は、ほとんど当時唯一といってよい力作だが、鄭氏時代から康熙雍正時代まで書いたところで、掲載誌の停刊とともに止まってしまった。また黄得時「晩近の台湾文学運動史」は、ややものたりない点はあるが、台湾新文学運動の最初の総括の栄をになうものだろう。

日本人による研究も、在台日本人の文学活動に関するものをふくめて、ごく少ない。在台日本人による文学活動は、はじめ漢詩文、ついで短歌、俳句など趣味的な伝統文学の創作が主で、近代文学の創作は、1920年代になってやっと、台北高校（1926年開設）、台北帝大（1928年開設）の学生、関係者を中心に起こってくる。それもまがりなりにも根づいたといえるのは、1930年代後半のことに属する。こうした事情も、文学批評や研究の少なかった理由のひとつだろう。こうしたなかで注目すべきは、雑誌『愛書』十四輯（1931.5）である。「台湾文芸書誌号」と銘うって、神田喜一郎、島田謹二「台湾に於ける文学について」、黄得時、池田敏雄「台湾に於ける文学書目」の二編を収めている。後者は清代以来台湾で刊行された文学書および雑誌のそれぞれについて、簡潔な解題を付した詳細な目録で、現在ではみられないものを多数ふくんでおり、貴重な資料となっている。前者はこの時期に書かれたほとんど唯一の台湾文学の通史として評価できるが、なにぶん短いものであり、また台湾人による新文学運動について、「多くは模倣的な作品にとどまつて、優秀な作品はあまり出てゐないようである」としか触れていないのは、時代的限界といえ、やはり片手落ちだろう。なお島田謹二「台湾の文学的過現未」（1931.5）は、この文の日本時代以降を（上）とし、（下）として「台湾の文学は日本文学の一翼として、その外地文学——特に南方外地文学として進むところに意義があろう」という立場からの将来への提言を収めたもの。こうした立場や、台湾人が言葉を奪われ、日本語を押しつけられたことについて、「内台人共通の地盤をもつやうになる」と評価する点など、今日ではやはり十分に批判しておかなければならない。なお島田にはこの時期、他にもいくつかの綿密な個別研究があるが、すべて台湾における日本人の文学活動に関するものである。

これ以外のものとしては、志馬陸平「青年と台湾——文学運動の変遷」、東方孝義「台湾習俗——本島人の文学」などが散見されるにとどまる。前者は日本人による近代文学活動についてやや詳しく、後者は台湾人による新文学運動を取りあげている点で注目されるが、いずれもさほど質の高い記述ではない。

総じてこの時期はまだ研究は緒についたばかりであり、そしてそれすらも次に述べるように、戦後に引き継がれることはほとんど無かったといえる。

2. 戦後 1960 年代まで

この時期の台湾研究全体については、戴國煒「台湾」（1969.7、データは3の項に掲げる）

に非常にすぐれた総括がある。戴は台湾関係の雑誌記事、論文の多くは「学術的専門研究よりも現状紹介もしくは時事解説的なもの」にすぎず、研究の「不振は目をおおうものがあ」として、その原因を三つ挙げている。すなわち、1.「外国研究者に対する身分・生活保障が日本の場合いまだに十分でないこと、このしわよせが台湾研究者の出現を阻み、台湾研究はせいぜい片手間の研究としてしか考えられ」ていないこと、2.「台湾研究をタブー視し、台湾について書く人間を台湾ロビースト視する特殊な日本的雰囲気」、3.「戦前派台湾研究者（特に元台北帝国大学や台湾総督府の関係者）の物故もしくは沈黙」、の三つである。

このうち第二点が、もっとも主要な原因だろう。1972年の日中国交回復まで、日本政府が蒋介石政権を唯一の正統政府と認め、中国敵視政策をとりつづけたことが、逆に多くの中国研究者にとって、台湾について語ることは政府の中国政策を支持するものであるかのように感じさせ、これをいさぎよしとしない雰囲気をつくり出した。また侵略戦争への反省と、社会主義思想とが、共産党政権による新中国の建設を、進んだ、すぐれたものと感じさせ、逆に国民党政権による台湾支配を、後れた、否定されるべきものとして感じさせ、それがひいては台湾自体の研究をも軽視させ、ないし大陸との関わりからのみ台湾を見る風潮を作り出したことは事実だろう。またこうした風潮の背景には、研究者の事大主義と、植民地支配の遺産としての台湾への蔑視があったことも否定できない。総じてこの時期の台湾研究は、大陸とのかかわりからのみ行なわれており、台湾の社会自体を対象とする研究はほとんど行なわれてこなかったといっても過言ではない。

もっともこの時期台湾自身の内部においても、台湾研究は、独立運動につながるものとして、弾圧の対象とされやすく、あまり多くの研究は行なわれていない。そうした事情も、台湾研究の不振の一因ではあろう。だが、文学研究についてだけでも、各種の文献委員会に拠った王詩琅、廖漢臣らの研究はすでに進んでおり、見る気さえあればなお多くのものを見ることはできたはずだ。にもかかわらずこうした研究にほとんど目を向けることのできなかった日本の研究者のあり方は、やはり深く反省されなければならない。

戴のいう第三点については、文学研究もまったくその例外ではない。島田謹二をはじめほとんどの関係者は、戦後台湾文学についてほとんど発言していない。戦前の台湾文学界を知るものの発言として、私の知る限りでは、池田敏雄、中村哲、坂口禰子らの数編の文章（文献目録参照）があるだけだ。しかも池田、中村は、文学を専門とする人たちではない。植民地支配を罪惡として、タブー視し、これに触れまいとする姿勢が、研究の断絶と空白を生み出し、植民地支配の実体を客観的に認識し、克服する道を阻んでしまったのだともいえよう。こうした状況はほぼ今日まで持ち越されてきており、戦後50年になろうとしている現在では、すでに多くの貴重な証言が失われてしまったといえる。なお、坂口禰子は、戦後も台湾を題材とする創作を続け、「蕃地」（『蕃地』新潮社、1954.3に収録）で新潮賞を授賞、「蕃婦ロボウの話」（『蕃婦ロボウの話』大和出版、1961.4に収録）で芥川賞候補となるなど、台湾時代から一貫した活動を続けた数少ないひとりといえる。

さて、以上のような理由から、この時期中国文学研究者、日本文学研究者による台湾文学の研究は、まったく無いといってもよい。この時期の研究として挙げうるのは、ほとんど尾

崎秀樹と王育徳による、二つの孤立した研究のみであるといっていよい。

王育徳「文学革命の台湾に及ぼせる影響」(1959. 10) は、台湾の新文学運動の形成について日本語でかかれた戦後最初の論文である。この時点で書かれたものとしては、過不足なくよくまとめられたものといえよう。だがこの論文は、その後長い間中国文学界で孤立したまま、後継の論文を持たなかった。王育徳自身もその後は台湾語の研究を主とし、また独立運動の立場からする台湾の通史『台湾』(1964. 1)の著者として知られた。この本は、長い間台湾に関心を持つものが入手しうるほとんど唯一の入門書の観を呈し、影響も大きかったが、文学についての記述はほとんどなく、また記述の立場も独立運動の立場を強く打ち出したもので、前掲論文とはややスタンスを異にしているように感じられる。また、王育徳『台湾海峡』(1983. 1)は、台湾の戦後文学を扱った論集だが、独立運動の立場がやや強すぎて、客観性に欠けるように思われる。こうして王育徳の前掲論文は、王育徳自身の中でも孤立しているように見える。(なおこの論文は、『台湾海峡』にも改稿収録されているが、原載とはだいぶニュアンスを異にしている)

尾崎秀樹『近代文学の傷痕』(1963. 2)は、竹内好、平野謙、橋川文三、安田武、石田雄、内川芳美らとの共同研究「戦争下の文学」の成果のひとつで、日本時代の台湾における文学を対象とする研究論集である。その文学史についての記述は、『台北文物』3-2, 3 (1954. 8, 12)の「新文学・新劇特輯」、および前掲『愛書』十四輯の範囲を出るものではなく、ものたりない点も多いが、しかし戦後はじめてこれらの資料を取りあげた功績は大きく、また、本書全体の問題意識は、今もまったく古びていない。中でもっともオリジナルなものとして評価しうるのは、大東亜文学者大会についての研究だろうが、日本文学研究の中でまだこれを継ぐ研究が現われていないように見えるのは、残念なことだ。本書刊行以来ほぼ三十年になろうとしている現在、本書がこの方面における唯一の専著であり続けていることを、我々は恥じなければならない。

なおこの時期には他に、許勢常安(許常安)の丘逢甲についての研究(1965. 6)がある。また直接台湾文学研究と関わるわけではないが、この時期のトピックとして、邱永漢の活躍に触れておく必要があるだろう。直木賞授賞の『香港』(近代生活社、1956. 6)をはじめ、『濁水溪』(現代社、1954. 12)、『密入国者の手記』(現代社、1956. 2)などはよく読まれたし、台湾についての啓蒙的な文章もいくつか書いていたはずだ。いわば日本人の軽視による空白を、王育徳と邱永漢という二人の独立運動家(当時)が埋めていたというのが、当時のおおまかな構図であったともいえようか。

3. 1970年代以後

後述のように、王、尾崎の孤立した研究を除いてはほとんど研究の行なわれてこなかった台湾文学が、やや注目を集め、研究が行なわれ、そして翻訳、紹介がなされるようになってきたのは、1970年代の末から80年代にかけてのことなので、文学研究のみに即して言えば、この項は「1980年代以後」として考えるべきであるかも知れないが、私の印象からいえば、

台湾研究、ないし台湾認識の新しい波は、70年代にすでに起こってきており、文学研究はこうした動向からやや後れてあとをついていったもののように感ぜられる。そこでここでは、あえて「70年代以後」としてまとめて考えてみたい。

いま「台湾研究、ないし台湾認識の新しい波」といったが、それは一言でいえば、台湾を大陸との関わりのみで見るのでなく、台湾自身を独自の、固有の対象領域としてとらえ、台湾そのものを研究、認識の対象にすえようとする姿勢のことである。それはまた台湾を国民党政権の支配する地域として上から捉えるのではなく、台湾の人々の生活する島として下から捉えようとするということでもあり、またそれ自身を独自の地域研究の対象領域にすえようとするということでもある。

こうした風潮の起こってきたについてはいくつかの理由が考えられるが、第一に、当時世界的に起こっていたマイノリティの復権運動をうけて、日本でも在日朝鮮人、在日中国人、アイヌ、未解放部落、沖縄等の問題があらためてとりあげられ、そうしたなかからまた植民地支配の問題をどう捉えるかが問題とされてきたことが挙げられよう。またこの頃アジア各地で起こっていた日本の経済侵略への批判も、あらためて侵略、植民地支配の問題を考えさせる要因となった。劉佳欽・顔尹謨事件（1967）、陳中統事件（1969）、柳文卿事件（1968）、陳玉璽事件（1968）、劉彩品問題（1970）などは、出入国管理体制の問題を通じて、日本の植民地支配を改めて考えさせる契機となったし、74年のスニヨン（中村輝夫）さんのモロタイ島での救出と、それを契機とする台湾人元日本兵士の補償問題も、日本の責任を改めて問いかけるものだった。後で触れる田中宏らの翻訳（リスト12）も、こうした問題関心の延長線上のものであったと思われる。

第二に、72年の日中国交回復が、逆に台湾の未来への関心をよびおこしたことも否定できない。

こうした背景の中で、70年前後に、にわかに台湾に対する関心が高まり、文末に付した「戦後日本刊行の台湾文学書及び台湾文学翻訳書目録」に見られるとおり、吳濁流の作品が続けて刊行され（リスト4～6）、また各種の雑誌が台湾特集を組んでいる。いま、当時目に触れたかぎりの雑誌と特集のタイトルを挙げておく。

- 中国 69号 1969.8 台湾高山族の反乱〈霧社事件〉
- 102号 1972.5 台湾
- アジア 61号 1971.11 台湾——知られざる中国の孤島
- 日中 第2巻3号（3月号） 1972.2 台湾問題への視角
- 第2巻8号（8月号） 1972.7 「台湾」問題
- 東風 37号 1975.4 日本は「台湾」で何をしたか
- 朝日アジアレビュー 39号（第9巻3号） 1978.9 台湾の現状

なお『中国』65号（1969.4）～69号には、吳濁流「無花果」が掲載されている。

さて、第三に、戴國輝、劉進慶、許世楷、涂照彦、黃昭堂、戴天昭ら、日本に留学し、日本を研究の場と定めた学者たちの研究成果が、この頃現れはじめたことも、台湾研究が盛ん

になってきた理由のひとつだろう。ここにそれぞれの主要著書を掲げておく。

- 戴國輝 日本人との対話——日本・中国・台湾・アジア 社会思想社 1971. 8
 日本人とアジア 新人物往来社 1973. 10
 境界人の独白——アジアの中から 龍溪書舎 1976. 8
 新しいアジアの構図 社会思想社 1977. 6
 台湾と台湾人——アイデンティティを求めて 研文出版 1979. 11
 台湾 岩波書店 1988. 10
- 劉進慶 戦後台湾経済分析 東京大学出版会 1975. 2
 台湾の経済——典型 NIES の光と影 東京大学出版会 1992. 2
 * 隅谷三喜男、徐照彦と共著。
- 徐照彦 日本帝国主義下の台湾 東京大学出版会 1975
 土着と近代のニックス・アセアン 御茶の水書房 1987
 NICS——工業化アジアを読む 講談社 1988. 2
 東洋資本主義 講談社 1990. 10
 台湾の経済——典型 NIES の光と影 東京大学出版会 1992. 2
 * 隅谷三喜男、劉進慶と共著。
- 許世楷 日本統治下の台湾 東京大学出版会 1972. 5
- 黄昭堂 台湾民主国の研究——台湾独立運動の一断章 東京大学出版会 1970. 7
 台湾の法的地位 東京大学出版会 1976. 12
 * 彭明敏と共著
 台湾総督府 教育社 1981. 4
- 戴天昭 台湾国際政治史研究 法政大学出版局 1971. 12

これらの研究を最初の牽引車として、日本の台湾研究は進んできたといってもよい。なおこのうち、一般への影響は、戴國輝がやや大きいと言っていいただろう。単行本には未収録だが、次に掲げる三つの論文は、台湾そのものを研究対象とすべきことへの宣言として読めるし、他の著書も一般の読者に対するよき問題提起となっていた。また、さきに述べた吳濁流の作品の刊行についても、戴の尽力が大きい。

- 戴國輝 日本人による台湾研究——台湾旧慣調査について——季刊東亜 4 1968. 8
 台湾 アジア経済 10-6・7 1969. 7
 * 『アジア経済』同号は、100号記念として「日本におけるアジア、アフリカ、ラテンアメリカ研究」の総括を行なっている。戴論文は、その台湾の項。
 清末台湾の一考察——日本による台湾統治の史的理解と関連して 『日本法とアジア 仁井田陞博士追悼論文集第二巻』所収、勁草書房 1970

また、台湾総督府警察沿革誌の復刻（『日本統治下の民族運動』上、下として、風林書房、

1969.7, 1969.10, また『台湾社会運動史』として龍溪書舎, 1973.5), 『現代史資料』21, 22 (台湾編の一, 二。みすず書房, 1971.3, 1971.12) の出版, 台湾での『台湾民報』等の復刻 (東方文化書局, 1973, ただしこれ以前にももう一種類復刻があったように思う) などが, ようやく日本時代の本格的な研究の条件を整えつつあった。

さて, 第四の理由として, 台湾内部での変化が挙げられよう。先に「台湾自身を独自の, 固有の対象領域としてとらえ, 台湾そのものを研究, 認識の対象にすえようとする姿勢」が現われてきたと述べたが, こうした変化はじつは台湾自身にも当てはまるのであって, 台湾研究がタブーであったそれまでの状況を打ち破って, 70年代の民主化運動の進展とともに, 新しい台湾研究の動きが起こってきた。日本の研究はこうした動きの影響をすぐに受け取れるだけのレベルには達していなかったように思われるが, やがて徐々にその影響がおよんできたのは, 当然のことであつたろう。なお, 台湾における文学史研究については, 以前「台湾新文学運動史研究の新しい段階」(1988.10) で簡単な総括を試みたので, ここではこれ以上触れない。

ここで私事にわたることを許していただければ, 私自身は1970年に戴國輝氏の主催する研究会に参加することで, 研究をはじめた。この会をはじめ東寧会, ついで後藤新平研究会と称し, 78年に台湾近現代史研究会と改称, 研究同人雑誌『台湾近現代史研究』を創刊(1978.4), 第6号(1988.10)まで出して解散した。この会の共同研究の成果としては, 他に『台湾霧社蜂起事件——研究と資料』(社会思想社, 1981)がある。会にかかわった同人は, 池田敏雄, 中村ふじゑ, 小島麗逸, 加藤祐三, 檜山幸夫, 若林正文, 春山明哲, 金子文夫, 森久男, 河原功, 宇野利玄, 林正子, 近藤正巳, クリスチャン・ダニエルス, 陳正靨, 張士陽, 岡崎郁子, 松永など。このうち河原, 陳, 岡崎, 松永に文学関係の研究がある。(文献目録参照)

さて, 「戦後日本刊行の台湾文学書及び台湾文学翻訳書目録」にみられるとおり, 台湾文学の翻訳, 紹介は, 1970年代に始まっているが, このうち7, 9は, 外省人作家によるもので, 内容も大陸を舞台とするものである。また, 10は, 台湾文学に対する関心よりは, 文化大革命への関心に重点をおいて, 訳されたもののように思われる。したがって台湾土着の作家の作品を, 台湾への関心の中で翻訳, 紹介したのは, 12が最初ということになる。(3は笠の編集ということもあり, しばらく除外して考える) ついでに言えば, 1, 2, 4, 5, 6, 8は, もともと日本語で書かれたもので, 原著というべきものである。4所収の「無花果」は, 前述の雑誌『中国』に「編集部訳」として掲載されたものだが, これは同著が台湾では発禁とされており, 著者の身に危険の及ぶ可能性を恐れて, 日本で勝手に訳したという体裁をとったため, 実は著者から渡された原文であったという。

12の刊行後, その訳者のひとり田中宏と, 井口晃, 大石しげ子, 中村ふじゑ, 若林正文, 林正子, 陳正靨, 岡崎郁子, 松永などの共同作業によって, 13, 14, 18が続いて出された。

ちょうどこの頃, 関西の若手中国文学研究者によって組織された研究会, 咄啞之会のメンバーが, 台湾文学への関心を深め, その機関誌『咄啞』では, 二度台湾文学特集が組まれた。(13号, 1980.4, 24・25号, 1989.7) また, 塚本照和, 山田敬三らも研究をはじめ, 塚本を

代表として台湾文学研究会が組織された。同会は1982年6月に『台湾文学研究会会報』を創刊し、現在17-19合併号(1992.6)まで出されている。この会のメンバーは、他に下村作次郎、今里禎、中島利郎、野間信幸、沢井律之などで、綿密な実証と丹念な資料の発掘を特色とする活動を現在も持続している。(文献目録参照)また、翻訳『バナナポート』(目録26)も、この会の成果のひとつといえよう。

こうして80年の前後に研究や翻訳が活発に行なわれるようになってきた背景としては、前記の70年代における台湾への関心の深まりもあるが、直接にはやはり、77,78年の郷土文学論争の前後から、台湾の同時代の文学の面白さが日本にも伝わるようになってきたことを指摘しておかなければなるまい。前述リスト12『さよなら・再見』の表題作は、すでに福田桂二によって『世論時報』1977年9月号～1978年3月号に訳載されていたものだが、その後田中宏が前述『朝日アジアレビュー』の台湾特集に「台湾における新しい文化潮流」を書き、それがきっかけとなって12の翻訳が企画されたという。田中論文は日本に初めて郷土文学論争を紹介したものだし、福田の訳は黄春明の作品が台湾でベストセラーとなっていたのに刺激されてのことであったという。そして黄春明のベストセラー化は、台湾でいわゆる「郷土文学」が広く認知されるにいたった重要な契機のひとつであったと考えられる。

私などが台湾の同時代文学の面白さに気付かされたのは、香港で出されたアンソロジー『台湾作家選集』(台湾作家選集編委会発行、1976.10。のち『台湾郷土作家選集』、同編委会発行、1978.11、として改題発行)によってであった。同書は頼和、楊遠から王拓、李昂にいたる十八人の作家の作品二十二篇を集めたもので、戦前から70年代文学までの台湾文学を通観してみせた最初の本であったと思われる。いわば郷土文学論争によって定位されるにいたった文学の内実を、すでにそれ以前に先取りしていたかの感がある。香港ではそれ以前に黄春明、王禎和ら現代作家の作品と、尉天驄らの評論を集めた劉紹銘編『台湾本地作家短編小説選』(小草出版社、1972年序。のち『本地作家小説選集』大地出版社、1976.7として台湾で発行)があるが、これらの表題と発行年だけ見ていても、70年代の新しい文学動向が、郷土文学論争の前後に定位され、それとともに台湾文学そのものが再認識されてゆくさまがわかるように思う。

さらにまた、大陸で最初に出された台湾文学のアンソロジー『台湾小説選』(人民文学出版社、1979.12。その後(二)が1983.10、(三)が1987.12に刊行された)の実質的編者である武治純氏に北京でお会いする機会があったが、氏もまた郷土文学論争を通じて台湾文学の面白さに気づき、79年の台湾政策の転換に乗じてこの選集の刊行を企てたが、なおこうしたものの出版には大きな困難があったという。その後大陸でも台湾文学の研究、紹介がさかんになってくるが、こうした大陸における動向がまた、日本の中国文学研究者に台湾文学の面白さに気づかせる契機のひとつになった。

こうした台湾文学の面白さと密接に関わることだが、台湾が永く大陸と切り離されてあったことによって、そしてまた経済成長と民主化運動の進展によって、台湾が徐々に大陸とは異なった社会として形成されてきたこと、そうした台湾の独自性の形成が、我々に台湾を固有の対象領域として見させるに到った最大の原因であることも、指摘しておかねばなるまい。

そして実は郷土文学論争は、そうした台湾の独自性に気づかせる契機のひとつであったともいえる。とすれば、80年前後に台湾文学への関心が深まってきたのは、決して偶然ではないのだともいえよう。

さてこうした研究の現状を見渡していえることは、まだまだ研究は緒についたばかりだということだ。日本時代については、台湾文学研究会の努力などによって、いろいろなことがわかってきたが、とりわけ戦後文学についての研究は、資料的制約もあって、まだまだ不十分だ。私は現在の台湾文学がかかえる二つの大きな問題は、台湾意識の問題と、高度消費社会における文学の運命の問題であり、またこの両者がどのように関わるのかという問題だと思うが、こうした台湾文学の本質に関わる研究はまだまったく手をつけられていない。そうした意味でも、台湾文学の研究はまだ始まったばかりなのだといえよう。

なおこの項では個々の論文の内容に触れるいとまを失った。また秋吉久紀夫、黄英哲、黄美慧、新妻佳珠子、蜂矢宜朗、藤井省三、山口守、劉孝春らの研究については言及することさえできなかった。すべて他日を期したい。

*付記 本稿は韓国の中国現代文学学会主催の第二回中国現代文学国際学術大会——台湾現代文学（於ソウル，1992.10.9-10）での報告に，93年7月に若干の手を加えたものである。下村論文に加え，報告後には岡崎郁子「台湾文学日訳史」も出て，ますます屋上屋を重ねる感がないでもないが，いまはしばらくこのままの形で発表させていただくこととする。

戦後日本刊行の台湾文学書及び台湾文学翻訳書目録

1. 吳濁流 アジアの孤児 一二三書房 1956.4
2. 同 歪められた島 ひろば書房 1957.6
- *1の改題
3. 『笠』編集委員会編訳 華麗島詩集——中華民国現代詩選 若樹書房 1971.9
4. 吳濁流 夜明け前の台湾 社会思想社 1972.6
5. 同 泥濘に生きる 社会思想社 1972.11
6. 同 アジアの孤児 新人物往来社 1973.4
7. 陳紀澄著，藤晴光訳 荻村の人びと 新国民出版社 1974.10
8. 張文環 地に這うもの 現代文化社 1975.9
9. 紀剛著，加藤豊隆訳 滾滾遼河 元在外公務員援護会 1978.11
10. 陳若曦著，竹内実訳 北京のひとり者 朝日新聞社 1979.2
11. 北原政吉編訳 台湾現代詩集 もぐら書房 1979.2
12. 黄春明著，田中宏，福田桂二訳 さよなら・再見 めこん 1979.9
13. 曾心儀ほか著，松永正義ほか訳 彩鳳の夢——台湾現代小説選Ⅰ 研文出版 1984.2
14. 李双沢ほか著，松永正義ほか訳 終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ 研文出版 1984.7
15. 瓊瑤著，田宮順訳 夢語り六章——瓊瑤作品集Ⅰ 現代出版 1984.11

16. 瓊瑤著, しばたまこと訳 銀狐——瓊瑤作品集2 現代出版 1984.11
17. 瓊瑤著, 北川ふう訳 窓の外——瓊瑤作品集3 現代出版 1984.11
18. 鄭清文ほか著, 松永正義ほか訳 三本足の馬——台湾現代小説選 III 研文出版 1985.4
19. 北影一編訳 台湾詩集 土曜美術社 1986.7
20. 李魁賢著, 北影一訳 楓の葉——李魁賢詩集 アカデミー書房 1987.6
21. 頼和ほか著, 陳逸雄訳 台湾抗日小説選 研文出版 1988.12
22. 陳千武・北原政吉編 続・台湾現代詩集 もぐら書房 1989.5 (未見)
23. 白先勇著, 中村ふじゑ訳 最後の貴族 徳間文庫 1990.9
24. 劉大任著, 岡崎郁子訳 デイゴ燃ゆ 研文出版 1991.1
25. 三毛著, 妹尾加代訳 サハラ物語 筑摩書房 1991.3
26. 張系国著, 下村作次郎ほか訳 バナナボート JICC 出版局 1991.9
27. 呉錦発編著, 下村作次郎監訳 悲情の山地——台湾原住民小説選 田畑書店 1992.11
28. 朱天文著, 田村志津枝訳 安安の夏休み 筑摩書房 1992.11
29. 秋吉久紀夫訳編 陳千武詩集 土曜美術社出版販売 1993.2
30. 鄭清文著, 岡崎郁子訳 阿里山の神木——台湾の創作童話 研文出版 1993.5
31. 李昂著, 藤井省三訳 夫殺し 宝島社 1993.6

* 1, 2, 4, 5, 6, 8 は, もともと日本語で書かれたもので, それ以外は翻訳である。

日本における台湾文学研究文献目録

- 秋吉久紀夫 台湾の孤魂の詩人楊華——一九三〇年代の中国文学の一齣 九大教養部・文学
論輯 30 1984.8
陳千武の横顔とその道程『陳千武詩集』第六部 土曜美術社出版販売 1993.2
* 秋吉の陳千武に関する論文, エッセイなどをまとめたもの
- 池田敏雄, 黄得時 台湾に於ける文学書目 愛書 14 1931.5
- 池田敏雄 張文環『『台湾文学』の誕生』後記 台湾近現代史研究 2 1979.8
『文芸台湾』のほろ苦さ——龍瑛宗氏のことなど 台湾近現代史研究 3 1981.1
- 今里 禎 「五・四」文学運動の台湾への影響と鍾理和文学 天理大学学報 144 1985.3
- 王 育 徳 文学革命の台湾に及ぼせる影響 日本中国学会報 11 1959.10
台湾——苦悶するその歴史 弘文堂 1964.1 単行書
* 増補改訂版が, 1970.5 に刊行され, さらにこれに宗像隆幸が増補したもの
が, 『新しい台湾』と改題されて, 1990 に刊行された。
台湾海峡 日中出版 1983.1 単行書
- 岡崎郁子 現実の台湾文学——陳映真 横浜商大論集 19-1 1985.9
台湾郷土文学の香——李喬 津田塾大学紀要 19 1987.3
台湾作家の考える「文学」——訪問インタビュー 未名 6 1987.12
台湾文学の新テーマ——訪問インタビュー II 吉備国際大学開学記念論文集
1990

- 非漢族の台湾文学——拓拔斯 吉備国際大学研究紀要 2 1992
 二・二八事件と文学 中国研究 25 1992.7
 台湾文学のなかの昭和という時代 昭和文学研究 25 1992.9
 台湾文学日訳史 ふぉるもさ 1 1992.11
- 尾崎秀樹 近代文学の傷痕 普通社 1963.2 単行書
 *のちこれに後掲『旧植民地文学の研究』から「満州国」における文学の種々相を加えて、岩波書店から、1991.6に刊行された。
 旧植民地文学の研究 勁草書房 1971.6 単行書
 *前掲『近代文学の傷痕』に大幅に増補したもの。
- 河原 功 佐藤春夫『殖民地の旅』をめぐって 成蹊国文 8 1974.12
 中国雑誌解題『文芸台湾』 アジア経済資料月報 17-2 1975.1
 楊逵——その文学的活動 台湾近現代史研究 1 1978.4
 台湾新文学運動の展開——日本統治下台湾における文学活動① 成蹊論叢 17 1978.12
 中村地平・その作品と周辺 成蹊国文 14 1980.12
 大鹿卓「野蛮人」をめぐって 成蹊論叢 25 1986.12
- 神田喜一郎, 島田謹二 台湾に於ける文学について 愛書 14 1931.5
- 黄 得 時, 池田敏雄 台湾に於ける文学書目 愛書 14 1931.5
- 黄 得 時 戦後の台湾文学運動史 台湾文学 2-4 1942.10
 台湾文学史序説 台湾文学 3-3 1943.7
 台湾文学史(二), (三) 台湾文学 4-1 1943.12
- 黄 英 哲 張深切略年譜(二稿) 台湾文学研究会会報 15・16 1990.6
 台湾における許寿裳の足跡 東亜 291, 292 1991.9, 1991.10
- 黄 美 慧 佐藤春夫と台湾・中国——「星」と「陳三五娘」の比較研究 台湾文学研究会会報 17-19 1992.6
- 許 勢 常 安 丘逢甲の詩について——その時事に関する詩 漢文学会会報 24 1965.6
- 坂 口 禰 子 楊逵と葉陶のこと——ある夫妻の戦中・戦後 アジア 6-10 1971.11
- 沢 井 律 之 鍾理和の「中国体験」について 台湾文学研究会会報 8-9 1984.12
 台湾作家鍾理和の民族意識 未名 7 1988.12
- 志 馬 陸 平 青年と台湾——文学運動の変遷 台湾時報 1936.10~1937.1
- 島 田 謹 二 台湾の文学的過現未 文芸台湾 2-2 1931.5
 *のち西川満編『台湾文学集』, 大阪屋号書店, 1942.8に収録
 日本における外国文学——比較文学研究——朝日新聞社 1976.2 単行書
 *「台湾の文学的過去」(前掲に同じ), 「板山洲の『南菜園雜詠』」他をふくむ
- 下村作次郎 王詩琅の小説について 台湾文学研究会会報 2 1982.12
 台湾新文学の一断面——1940年発禁, 李猷璋編『台湾小説選』から 呷啞 21・22 1985.12
 戦後初期台湾文芸界の概観——1945年から49年 呷啞 24・25 1989.7
 日本における台湾文学研究 天理大学学報 169 輯 1992.3

- 台湾原住民の詩と文学 『悲情の山地——台湾原住民小説選』解説, 田畑書店 1992. 1
- 田 中 宏 台湾における新しい文化潮流——「郷土文学」の誕生 朝日アジアレビュー 35 1978. 9
- 陳 正 醒 台湾における郷土文学論戦（一九七七～一九七八） 台湾近現代史研究 3 1981. 1
台湾における「中国意識」と「台湾意識」——最近の文学・思想界での論争を中心に 中国研究月報 439 1984. 9
張系国『不朽者』試論——六十年代世代の「中国意識」との関連で 茨木大学人文学部紀要 22 1989
白先勇『孽子』と「中国」 猫頭鷹 7 1989. 12
- 塚 本 照 和 「台湾文学」に関するノート（一）——龍瑛宗の『ノバパイヤのある街』 天理大学学報 119 1979. 3
日本統治期台湾における文学管見 咄呷 13 1980. 4
台湾文学年表（試稿）——旧日本植民地時代（1985-1945） 南方文化 8 1981. 11
楊達作『新聞配達夫』（『送報伏』）のテキストのこと 台湾文学研究会会報 3・4 1983. 11
「益莊会」とその人々 咄呷 24・25 1989・7
- 東 方 孝 義 台湾習俗——本島人の文学 台湾時報 1936. 2, 5, 6
*のち東方『台湾習俗』, 同人研究会, 1942. 10 に一部を収録
- 中 島 利 郎 呂赫若「風水」について 咄呷 13 1980. 4
中国大陆発行雑誌所載台湾小説作品・作家資料目録稿 台湾文学研究会会報 1 ~11・12 1982. 6~1987. 3
「南島文芸欄」を探す 台湾文学研究会会報 7 1984. 7
台湾文壇における魯迅の影響（覚え書き） 台湾文学研究会会報 11・12 1987. 3
張我軍について——その略歴と著作 咄呷 24・25 1989. 7
「新文学雑誌叢刊」総目・人名索引 台湾文学研究会 1992. 3 単行書
- 中 村 哲 台湾の頼和氏 中村『知識階級の政治的立場』, 小石川書房 1948. 1
台湾人作家の回想 新日本文学 1962. 8, 9
- 新妻佳珠子 日本の植民地時代の台湾文学ノート・1——楊達の「新聞配達夫」について 目白近代文学 2 1980. 12
呂赫若「牛車」について——日本の植民地時代の台湾文学ノート・2 目白近代文学 3 1982. 6
- 野 間 信 幸 張文環の『地に這うもの』浅析 台湾文学研究会会報 10 1985. 7
『台湾文芸』における張文環
張文環の文学活動とその特徴 関西大学・中国文学会紀要 13 1992. 3
呂赫若——孝を描いた台湾人作家 中国哲学文学科紀要 1 1993. 3
- 蜂 矢 宣 朗 文芸作品に描かれた霧社事件 山辺道 20 1976. 3
南方憧憬——佐藤春夫と中村地平 台北・鴻儒堂出版社 1991. 5 単行書
*論文集

- 藤井省三 植民地台湾へのまなざし——佐藤春夫「女誠扇綺譚」をめぐって 日本文学 42-1 1993.1
- 松永正義 台湾文学の歴史と個性 『彩鳳の夢——台湾現代小説選Ⅰ』解説, 研文出版 1984.2
八〇年代の台湾文学 『終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ』解説, 研文出版 1984.7
文学から見た八〇年代の台湾 『いまアジアを考えるⅣ』, 三省堂 1986.9
台湾新文学運動史研究の新しい段階 台湾近現代史研究 6 1988.10
郷土文学論争(1930-32)について 一橋論叢 101-3 1989.3
- 山口守 仮面の言語が照射するもの——台湾作家楊逵の日本語作品について 昭和文学研究 25 1992.9
- 山田敬三 台湾文学の一断面——1970年代を中心に 現代中国 57 1983.6
王拓という作家——台湾当代文学管見 『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学文学論集』, 東方書店 1984.1
忘れられた作家群像——台湾現代文学素描 中国研究月報 436 1984.6
陳映真——苦悩する台湾の知識人 『岩波講座現代中国第5巻 文学芸術の潮流』, 岩波書店 1990.1
- 劉孝春 『新聞配達夫』の主題について 名古屋大学・人文科学研究 17 1988.3